

沖ノ島 21 号遺跡についての再検討（予察）

—記録写真の分析から—

岡寺 未幾

1. はじめに

九州北西岸から60kmに位置する沖ノ島は、古代祭祀遺跡の類い稀な記録の宝庫であり、日本列島と朝鮮半島およびアジア大陸の諸国間の交流が活発だった時期の祭祀、すなわち、4世紀に起こり9世紀末まで執り行われた航海安全に関わる古代祭祀のあり方を示す物証である。沖ノ島を含む宗像大社と新原・奴山古墳群からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、古代から現在まで発展し継承されてきた神聖な島を崇拜する文化的伝統の顕著な物証として2017年世界遺産に登録された。

遺産群の保存管理と公開活用を担う「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会（福岡県・宗像市・福津市・宗像大社）では、令和元年度よりデジタル・アーカイブ MUNAKATA ARCHIVES 構築事業を進めてきた⁽¹⁾。一度発掘調査を行うとその情報が失われることを特性とする考古遺跡の再検討を行う上で、沖ノ島の発掘調査にかかる写真資料のデジタル化は急務であり優先的に行ってきた。

この作業を進める中で、特に21号遺跡について発掘調査報告書である『宗像沖ノ島』（宗像大社復興期成会1979、以下「報告書」という）に掲載されていない、いくつかの事実が確認された。これらは、報告書を作成する際に採用されなかったものではあるが、遺跡の検討をする上で重要な事実であると考え、ここに報告し、今後、沖ノ島祭祀を考える上で材料としたいと考える。また、今回新たに発掘調査にともなう記録写真資料の分析を行うことにより、現在の視点から、21号遺跡についての検討を試みたい。

2. 21 号遺跡について

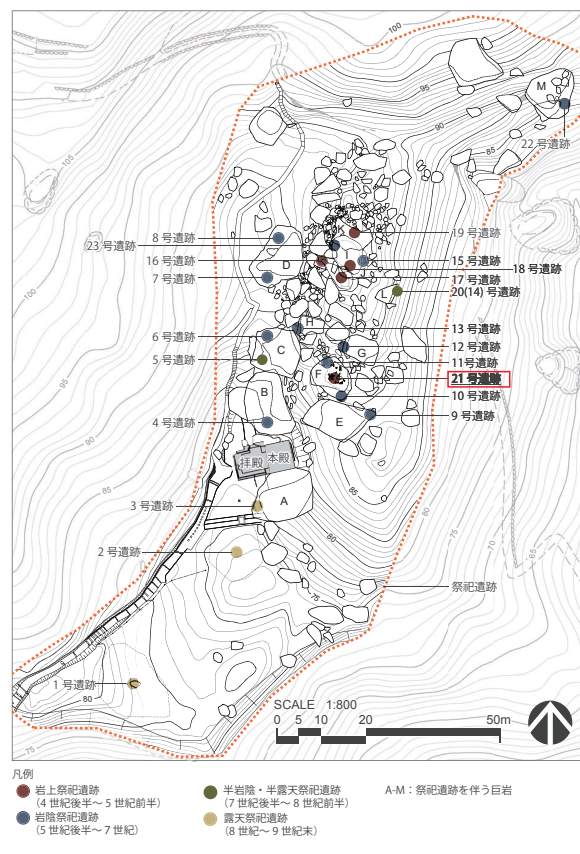
沖ノ島の南部中腹、原始林に囲まれた沖津宮社殿が鎮座する巨岩群の周辺に4世紀から9世紀にかけての古代祭祀に関わる22の遺跡が確認されている⁽²⁾（第1図）。祭祀は場所や内容から大きく、岩上祭祀（4世紀後半から5世紀中頃）、岩陰祭祀（5世紀後半から7世紀）、半岩陰・半露天祭祀（7世紀後半）、露天祭祀（8世紀から9世紀）の4段階に変遷するとされている。

21号遺跡は、巨岩群の中央やや南に位置するF号巨岩上面に築かれている（第2図）。5世紀中頃に位置付けられ、岩上祭祀の下限にあたる。報告書では遺跡の概要は以下のとおり記述される（第3図）。

「社殿からB号巨岩前（御金蔵）^{おかなぐら}を通り、C号・E号巨岩の間を30mばかり登って行く」とF号巨岩につく。F号巨岩は、その登り口（北端のもっとも低い所）で高さ3mをはかり、南端の最高点との間には約2mの高低差がある。巨岩上は東辺約8m、西南辺約6m、西北辺約5mのほぼ三角形を呈する。登り口は三段の階段状を呈するが、



第1図 沖ノ島祭祀遺跡の位置



第2図 21号遺跡の位置

人工的なものとは認めがたい。」(橋口1979)

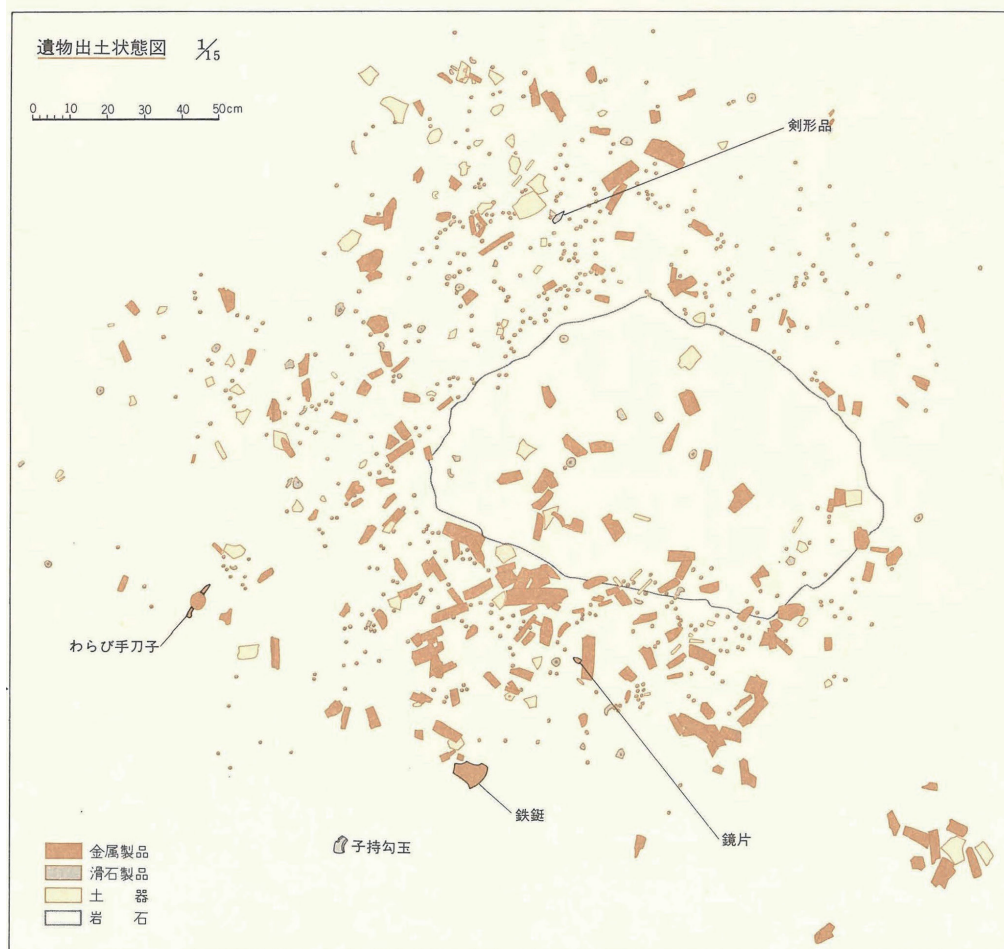
「21号遺跡はこの巨岩上のほぼ中央部に存在する長方形祭壇であり、長軸を北西—南東 (N-45°-E)にとっている。したがって四隅はそれぞれ東・西・南・北に位置する。」(橋口1979)

「北西辺と南西辺などに明瞭な岩の削り跡から祭壇を復元すると、長軸を北西—南東 (N-45°-E)にとる内法2.5m×2.2m、外法2.8m×2.5mの長方形となり、ほぼその中央部に長さ1.1m×幅0.8m×厚さ0.5m前後の大石を置いている。また西隅には0.7×0.45×0.5mの比較的大きな石を置き、その周辺に別区と言える部分をつくっている。」(橋口1979)

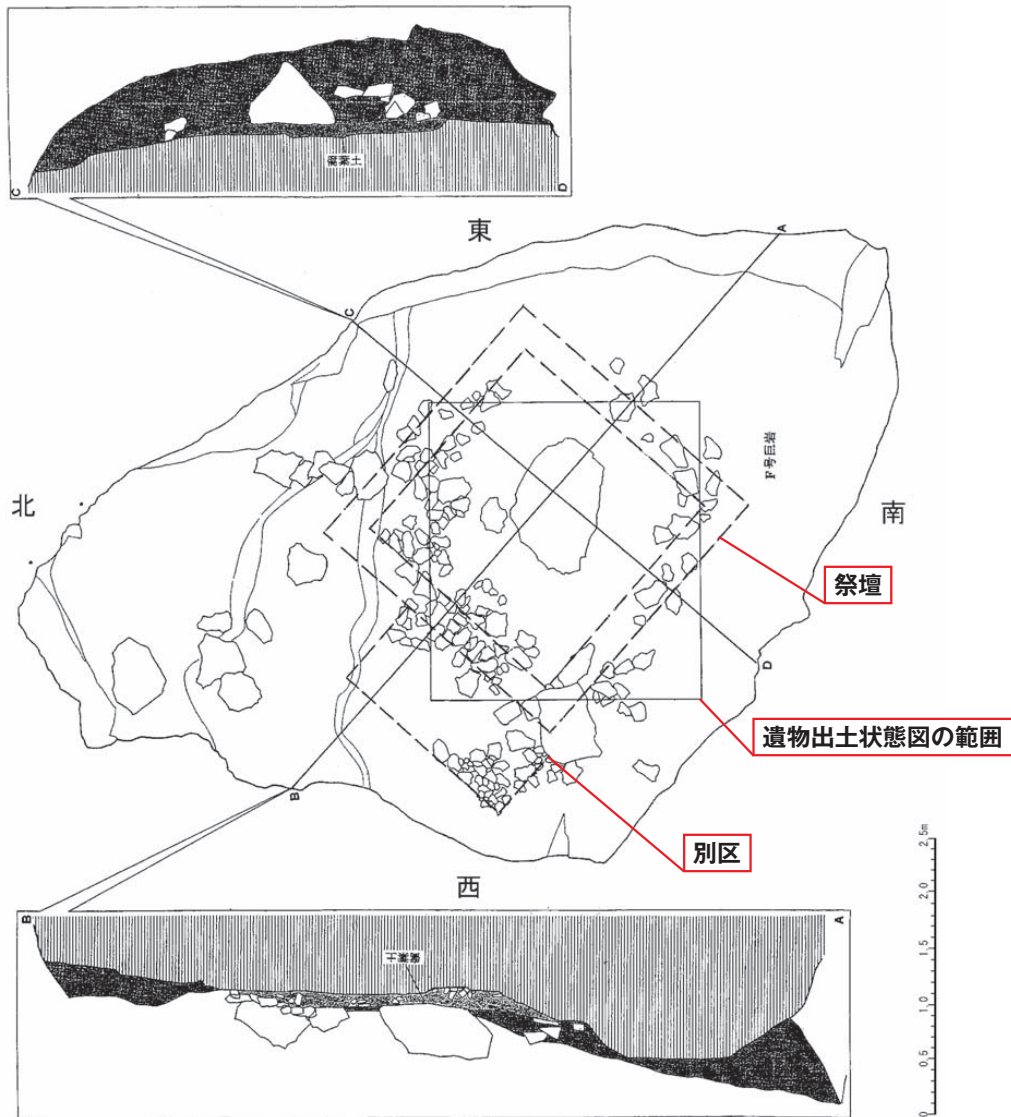
遺物出土状況については「流出がはげしい東隅をのぞき、ほぼ祭壇の内側全面にわたって散布する。玉類、滑石製有孔円板、滑石製雛形品は全面から出土し、埴・高坏こしきなどの土師器の小形手づくね土器はおもに大石の北西側、鉄器はおもに大石の南・西に多く、剣・刀・斧などは大石に接するように、また大石下に突き刺したような状態で出土している。鉄鋌は祭壇南西辺内側のほぼ中央部より出土している。

玉類には硬玉・碧玉・琥珀こはく・滑石製品がある。鉄器には実用品と雛形の両者がある。実用品としては剣、刀、鏃、鍛造鉄斧、鑄造鉄斧、わらび手刀子、鉋、釧やりがんなくしろなどがあり、雛形品としては、斧や円板がある。また祭壇の南隅外側より舶載の獣帯鏡片、滑石製子持勾玉、剣片、鉄地金銅張小札などの出土があった」(松本1979)とし、また「西隅の別区とも言える部分よりも、玉類などの出土がみられた」(松本1979)とある。

遺跡の評価については「今、西隅の大石を中心とする別区とも言える部分、南隅外側か



第3図 21号遺跡 平面実測図(上)・遺物出土状態図(下) (『宗像沖ノ島』 Fig102)



第4図 小田富士雄氏による21号遺跡祭壇復元図（小田2012第5図に加筆）

らの遺物の出土などからすると、西隅に比較的大きな石を立て、ここにも中心部と同様、木を立てていた可能性が強い。とするならば、四本柱を立てる祭祀の原初的形態を示すものといえよう。中央に大石を置き、降神の際の依代（磐座）とし、磐境としての長方形祭壇をもうけた21号遺跡は、巨岩上の祭祀としては最も完備された形態である」（松本1979）とする。

21号遺跡については、近年新たに再検討が行われている。三次全ての発掘調査に参加した小田富士雄氏は報告書で図化されなかった祭壇について検討し、平面実測図に祭壇と別区の範囲を明示した復元案を示した⁽³⁾（第4図・小田2012）。また当時の復元について触れ、祭壇西隅に大石を置くのは「傾斜面の最も低い隅部が崩壊しやすいことに備えての措置」であり「祭壇の四隅全てに適用されたものではない」としている。また「別区」については、報告書では文章が記載されるのみであったが、小田はこの長方形敷石を祭壇にともなうものであることを明確にした上で、朝鮮半島古代加耶地域の古墳の調査事例から、祭壇を礼拝する正面施設という新たな見解を示している。

更に勝浦峯ノ畑古墳と21号遺跡の出土の画文帯神獸鏡が同型鏡であることから、同古墳

被葬者が21号祭祀に関与したことを推定した（小田2012）。

これらの成果により、21号遺跡で行われた祭祀の評価については、「5世紀中葉」に行われた一度きりの祭祀であるというのが定説となっているが、近年では出土遺物の時期差に幅があることなどから、祭祀を複数回行ったとの見解も出されている⁽⁴⁾（笹生2011、篠原2011、新谷2012、花田2012等）。

以上、21号遺跡について概観してきたが、本稿では検討を進めるにあたって遺跡の解釈と事実を区別するため、F号巨岩上で確認されている遺構については、中央にある「祭壇」を「石組1」、巨岩西に位置する「別区」を「石組2」と表現する。

3. 調査経過（表1・写真1～11⁽⁵⁾）

沖ノ島祭祀遺跡の学術調査は宗像大社復興期成会により昭和29（1954）年以降、3次にわたって実施されている。21号遺跡は第3次調査第1回（昭和44（1969）年10月18日）で確認され、第3次調査第2回の昭和45（1970）年5月5日から25日まで発掘調査が行われた。調査の担当者は、松本肇（九州大学研究生[当時、以下同じ]）、橋口達也（九州大学大学院学生）、弓場紀知（九州大学大学院学生）であり、写真撮影は松見守道（出光美術館事務長）、阿久井長則（出光美術館館員）が担当した。高低差のある巨岩の調査写真を撮影するために調査前に巨岩東側に足場が組まれている。F号巨岩の上空に張り出して作られたこの足場のおかげで、遺構直上からの遺構写真の撮影が可能となった⁽⁶⁾。

まずは21号遺跡の調査の経過について写真を中心に追うことにしたい。令和元年度デジタル・アーカイブ事業でデジタル化した21号遺跡に関わる写真資料⁽⁷⁾は、宗像大社神宝館に収蔵されていたカラー・ネガフィルム24点、モノクロ・フィルム147点である。これらの資料と合わせて今回、報告書に掲載された図面（第3図）・写真⁽⁸⁾・調査日誌⁽⁹⁾（表1）及び、宗像大社神宝館所蔵の当時の発掘調査時のミーティング記録および実測図の原図を参考とした⁽¹⁰⁾。

写真1 発掘調査前（昭和45（1970）年5月8日撮影）

調査が行われる前のF号巨岩（以下「巨岩」とする）は鬱蒼とした樹林に囲まれ、巨岩上の表面は繁茂した植物に覆われているが、巨岩中央の大石がかるうじて見えている。

写真2 遺構検出状況（昭和45（1970）年5月11日撮影）

巨岩を覆う草木類の除去を終え、遺構を掘り下げる前の状況である。巨岩表面全体が表土によって覆われているものの、大石を中心とした四角の石組からなる石組1全体が確認できる。報告書では「発掘時の状態は、千数百年の風雪に半露出の状態であった」（橋口1979）とあるが、この写真をみると遺構の残存状況は意外と良好にみえる。

写真3 調査状況1（昭和45（1970）年5月11日撮影）

遺構を検出した後、更に表土を除去した段階での写真である。石組1の内外が全体に掘り下げられており、大石を中心とする遺構の全体がよりはっきりと検出されている。石組

1の南半分は既に平面実測図とほぼ同じ状態まで検出されている。

表1 21号遺跡調査日誌（報告書から抜粋・太字は追記）

第3次 第1回 1969/9/28-10/20		掲載写真との対応
1969/10/18	F号巨岩上の遺跡を21号遺跡とする旨、小田より提案があった。次回調査が提案される。	
第3次 第2回 1970/5/5-5/25		
1970/5/8	21号遺跡の足場組みが一番大きな仕事ようだ。	写真1 発掘調査前
1970/5/9	大きな鉄パイプを運んで高さ7～8mもあるF号巨岩に撮影用のやぐらをかけることは、まったく難作業で危険この上ない。	
1970/5/10	21号遺跡は松本・橋口・弓場・井上が担当することに決定。	
1970/5/11	21号遺跡では、巨岩上に石組みがあつて方形の祭壇をかたちづくっており、ここから鏡片、玉、鉄刀片などが発見されて、関係者を大いに喜ばせてくれた。	写真2 遺構検出状況 写真3 調査状況1
1970/5/12	21号遺跡では、縮尺5分の1の遺物出土状態図を作成し、同時に遺物取り上げを行なった。	
1970/5/13	21号遺跡のほうも表土上での図面取りなどを終え、次の掘り下げに入って各種玉類と鏡の鈕をみつけた。	写真11 大石のくぼみと 白玉検出状況
1970/5/14	休業日	
1970/5/15	21号遺跡ではもっぱら実測を行う。	写真4 調査状況2
1970/5/16	21号遺跡は昨日につづき祭壇内部の実測を行い、全作業の5分の3を終わる。	
1970/5/17	21号遺跡ではひき続き遺物の出土状態図の作成と遺物の取り上げを平行して行なったが、舶載鏡と思われる獣帯鏡片が出土したことは注目に値する。	
1970/5/18	21号遺跡ではひき続き実測および写真撮影に終始した。	
1970/5/19	21号遺跡では祭壇上に積もった腐植土を慎重にふるいにかける作業を行い、勾玉、白玉などを採集した。	
1970/5/20	休業日	
1970/5/21	21号遺跡は祭壇中央の依代の石を取り除き、琥珀製勾玉、鉄錠、白玉を取り上げ、西側から鉄斧が出るなど大収穫を上げることができた。 午前11時、全日空のヘリコプターが来たので、岡崎・松見が同乗して遺跡の航空撮影を行なった。	写真5 調査状況3 写真6 大石撤去の様子 写真7 大石下の状況 写真13 巨岩上からみた石組遺構
1970/5/22	21号遺跡は大半の作業を終了して祭壇の復元に取りかかる。 →復元作業の開始	写真8 復元検討段階
1970/5/23	21号遺跡は岩上の祭壇をもとどおり復元し、調査を全部終了する。 →復元完成 最後のミーティングでは、21号については弓場が全部終了した旨を報告した。そのあと、岡崎から総括的な説明があり、沖ノ島祭祀のありかたに有力な根拠をつかんだ旨を発表した。	写真9 復元された祭壇
第3次 第3回 1970/9/26-10/20		
1970/10/3	21号祭祀遺跡に残したままの櫓のパイプはずしにかかる。	
1970/10/4	午前、21号祭祀遺跡の鉄パイプはずし。 →この日以降、復元された祭壇に藁の絡まる写真が撮影される	写真10（この日以降） 調査後
1970/10/11	大場磐雄・亀井正道・波多野皖三氏ら視察。大場からは「沖ノ島は日本一の祭祀遺跡であり、とりわけ1号遺跡・21号遺跡はきわめて注目すべき遺跡である。」という発言。	
第3次 第4回 1971/5/9-5/18		
	(21号遺跡にかかる記述なし)	



写真1 発掘調査前（北から）（1970/5/8）



写真3 調査状況1（真上から）（1970/5/11）



写真2 遺構検出状況（東から）（1970/5/11）



写真4 調査状況2（真上から）（1970/5/15）



写真5 調査状況3（真上から）（1970/5/21）



写真6 大石撤去の様子（北東上空から）
（1970/5/21）



写真7 大石下の状況（北東から）（1970/5/21）



写真8 復元検討段階（北から）（1970/5/21）

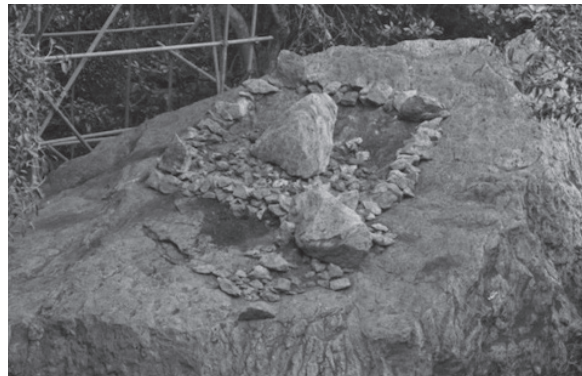


写真10 調査後の写真（西から）（1970/10/4以降）



写真9 復元された祭壇（西から）
（上は一部拡大。1970/5/23）

写真4 調査状況2(昭和45(1970)年5月15日撮影)

巨岩の全貌が現れる状態まで掘り下げ、全体が平面実測図とほぼ同じ状態まで検出された状況である。写真を見ると石組1の外側は巨岩の表面の岩肌がでていますが、内側はまだ土が埋っている。このことから、石組内側部分は巨岩全体が窪んでおり、小さな角礫を多く含む土で石組みの表面まで埋められている事がわかる。また石組南西辺には石列に沿う溝状の掘り込みがあり、報告書で「明瞭な岩の削り跡」と表現される部分に該当し、石組1の構築にともなうものと考えられる。なお、報告書掲載の平面実測図(第3図上)をみると平面図には現れない⁽¹¹⁾が、断面図にはこの窪みが段として表現されている。ただしその堆積は「腐葉土」とされ、後世の流れ込みと評価されている。

写真5 調査状況3(昭和45(1970)年5月21日撮影)

石組1の一番外側にあたる輪郭の石を残し、石組内部も巨岩の岩肌まで掘り下げた完掘状況である。複数の写真が撮影され、同日には航空写真の撮影も行われている。

この段階では、大石をややいびつな平行四辺形に石列が取り囲む石組1の平面プランが明瞭にみえる。北西・北東辺は平面実測図よりも、かなり密に石が配置される。石列は全周せず、東隅を欠き、北東辺は北半分まで、東南辺は南半分までしか回らない。

また大石の南、東西50cm、南北15cmほどの範囲に小角礫の分布がみられる。ここは多くの鉄製品が集中して出土した場所である。

またこの写真では「別区」とされる石組2のプランも明確に確認できる。石組1の北西辺の北側から西隅の大ぶりの石を結んだラインを長軸にとり、北側がややすぼむ長方形を呈する。

写真6・7 大石下の調査(昭和45(1970)年5月21日撮影)

完掘写真の撮影終了後に調査関係者が立会いのもと石組1中央の大石を撤去し、大石下の調査を行っている(写真6)。大石を外した直後の写真では、大石の直下にまとまった土の堆積が残されていた事が見て取れる(写真7)。ミーティング記録によると「5cmから10cmくらいの土の層」とかなりまとまった堆積が残されていたようである。先述したとおり報告書では腐葉土として後世の流れ込みと評価されており、人為的なものとは考えられていない。

写真8 復元検討段階(昭和45(1970)年5月22日撮影)⁽¹²⁾

調査完了後に、石組1の復元作業に着手している。二日間かけて行われた復元の検討途中のものであり、当時の調査関係者がこの遺構をどのように捉えていたか考えを辿る上で貴重な写真と考える。復元は調査状況3(写真5)の状況に基づき、当初の遺構の石材がそのまま用いられているようである。

検討段階では、最終的な復元と同様に石組を長方形に組むが、整った長方形ではなく、東隅は巨岩の形状に合わせてややカーブする。石列の石は中央の大石に対して長辺を直交する方向に置く。石組の内部には大石底辺から北西辺の中央にかけて小角礫が密に敷かれている。

5月21日のミーティング記録に「西側部分のところの石の下には土が残っているわけですが、この土を剥ぎますと（中略）もう一度復元する場合困難ですので、現状のままにとどめておき、この西側の石の下の土はとらないことに予定しています。（石組がくずれる恐れがある。遺構を残しておくということ）」とあり、祭壇の北西辺の一部は完掘せず、本来の遺構が残されたことがわかる。

写真9 復元された祭壇(昭和45(1970)年5月23日撮影)

21号遺跡を代表する写真で、報告書にも大きく掲載され、いわば調査時の公式見解としての復元といえる。検討段階(写真8)同様、調査状況3(写真5)にもとづいて復元されているが、石組1の平面プランは整った長方形となっている。石組の西隅だけでなく四隅に大ぶりの石が配置されている。石列の石は大石に対して石材の小口側を向けており、より石組の存在感が強調される。さらに石組の内側には、大石の底辺から石組北西辺にかけて小角礫が葺き敷かれる。

以上のように石組1がしっかりと復元されたのに対し、石組2はあまり意識されていなかったとみえ、南西の石敷と北西辺の溝状の掘り込みを残し土で覆われている。

写真10 調査後(昭和45(1970)年10月4日以降撮影)

この写真も21号遺跡を代表するものである。祭壇復元後(写真9)そのまま一定期間放置され、蔓性の植物が繁茂した状態を撮影したものである。

写真に巨岩東側の足場が写っていないことから、足場を撤去した第3次第3回調査(昭和45年10月4日)以降に撮影されたものであろう。

以上、調査経過を見てきたが、21号遺跡は石組1の西北部分を除き、石列と大石の下を完掘した後に、復元が行われていたことがわかった。石組本来の遺構平面プランを考えるに当たって最も多くの情報を伝えるのは調査状況3(写真5)であり、現地での復元はこの検出状況に基づき行われたことが明らかである。

一方、平面実測図は調査状況2(写真4)の段階で記録されており調査状況3で検出された石組や巨岩の掘り込みは図化されていない⁽¹³⁾。しかしながら21号遺跡の遺構を検討するためには、この情報を図化する必要があると考える。

また遺構と合わせて遺物の出土状況についてもみていきたい。写真11(昭和45(1970)年5月13日)は、大石の中央上方に滑石製白玉が2つ並ぶ小さなくぼみと、土を被った白玉が3つ見える細長いくぼみがある。これは報告書の「特筆すべきことは、祭壇中心部の大石上部に幅3cm×長さ15cmの小さなくぼみがあり、そこから滑石製白玉3個が出土した」(橋口1979)との記述と一致する⁽¹⁴⁾。この白玉の出土状況から調査者は「これは、玉などを懸けた木の枝を大石に立てかけておいたが、祭祀終了後しばらくたってから、玉がこのくぼみに落ち込んだものであることを示している。祭壇内側のほぼ全面に散布する玉類からもこのことはいかがえる」(橋口1979)と解釈して、石組の四隅に大ぶりの石を並べる復元が行われたのである。

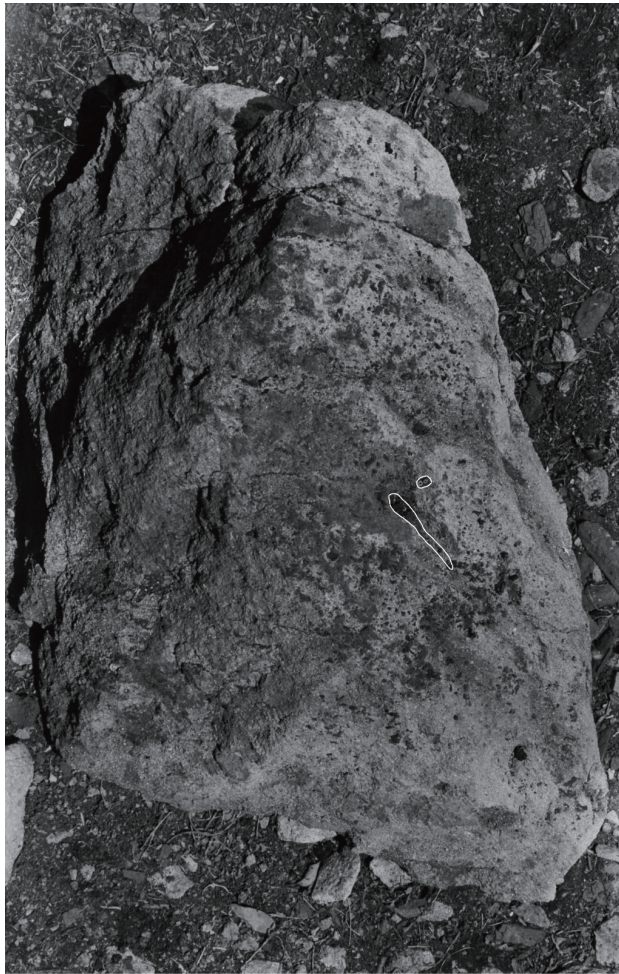
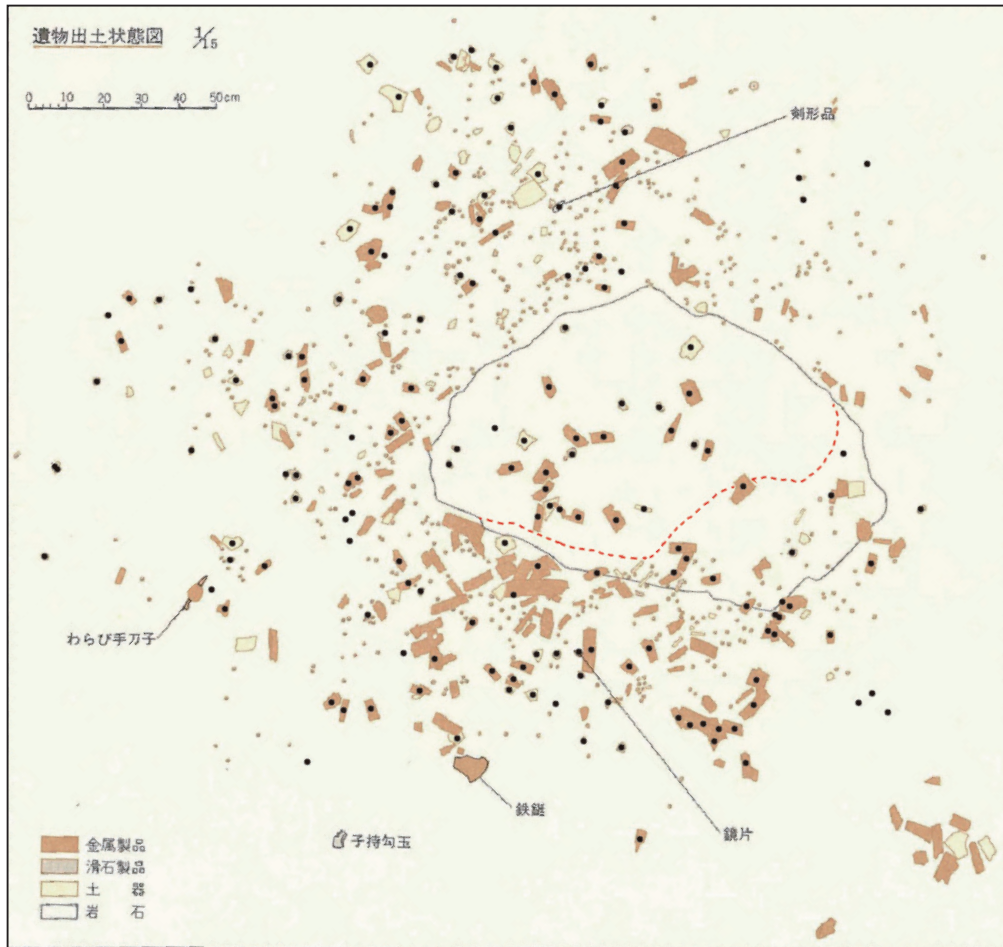


写真 11 大石のくぼみと白玉出土状況 北西から
(加筆、右は一部拡大。1970/5/11)

次に遺物と大石の関係についてであるが、遺物は石組1中央の大石の周辺から主に出土しているものの、報告書の図面(第3図下)では、遺物と大石の上下関係は明確でない。実測図の原図を確認したところ、遺物は黒で記録されたものと赤で記録されたものの二種類があった。この色分けについての記録はなく詳細は不明であるが⁽¹⁵⁾、平面実測図と同時並行で作業している事を考えると、調査状況3以降に石組1内側から出土した遺物を赤色で記録した可能性が高い。そこで、遺物出土状態実測図にこの赤色の遺物に印を付してみた。また原図に記録されていた大石の接地面のラインを追加した(第5図)。

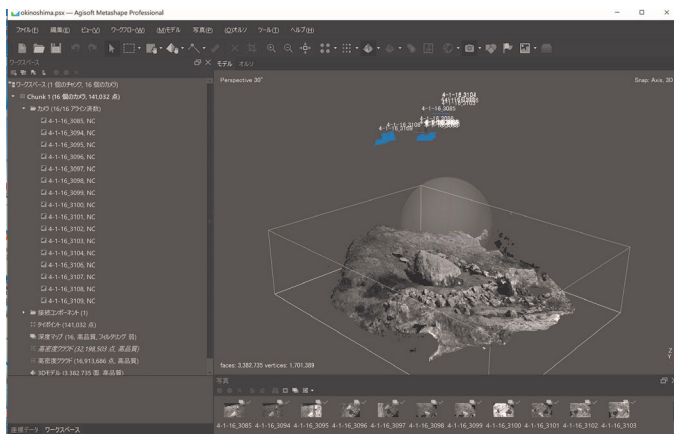
これによると、大石の下から鉄製品、滑石製品、土器が出土していることになる⁽¹⁶⁾。報告書では大石の下の土は「腐葉土」であり、また鉄器が「大石下に突き刺したような状態で出土している」(橋口1979)として、あくまで祭祀の奉獻品が、後に大石の下に流れ込んだものとする。しかし、大石直下に遺物を包含する堆積が存在することは、大石を安定して配置するために大石を設置前に平坦面を作ったこと、またその際に祭祀が行われた可能性を示しているのではないだろうか。



第5図 遺物出土状況図 (●は赤色で色分けされていた遺物) (『宗像沖ノ島』 Fig102 に加筆)

4. SfM (Structure from Motion) 技術を用いた分析の試み

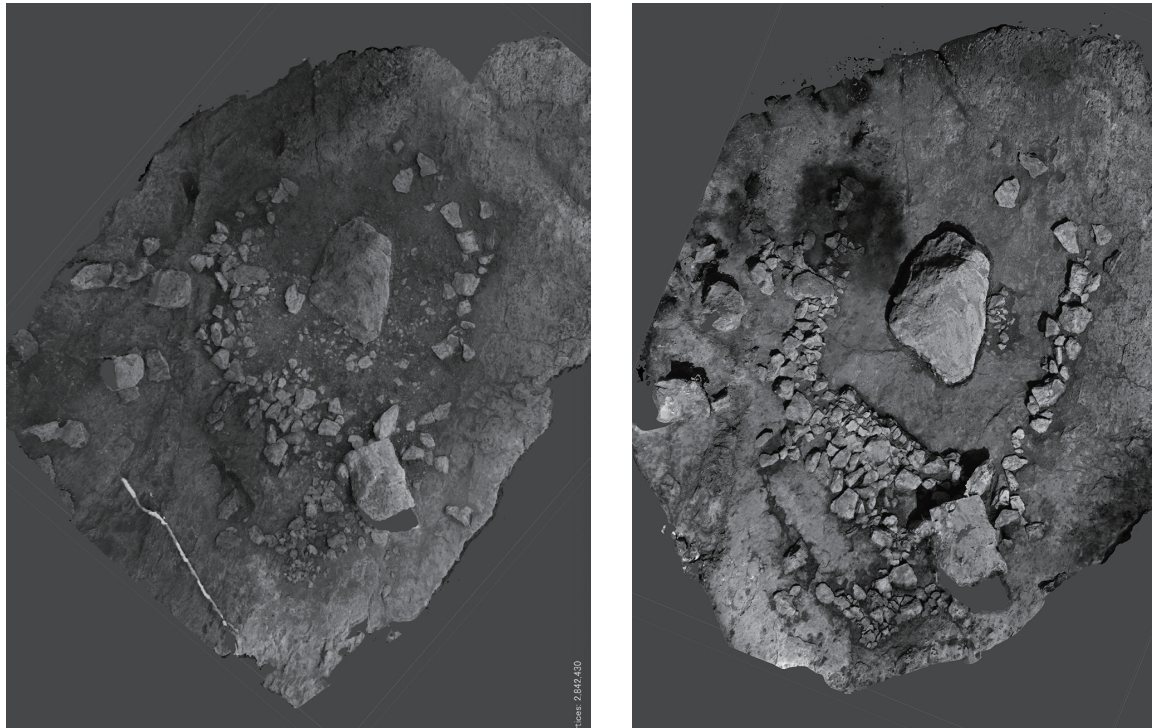
以上を踏まえ、石組の正確な平面プランを確定させるために、当時の記録写真からさらに新たな情報を引き出せるよう、複数の写真データから三次元モデルを生成するSfMにより、オルソ画像(平面直角画像)データの生成を試みた。21号遺跡の作図が行われた5月15日(調査状況2)の写真データ27点と、完掘状況を撮影した5月21日(調査状況3)の写真データ16点を使用し、Agisoft社製Metashape(Professional Edition)によりそれぞれで解析を行った結果、共に三次元モデルの生成に成功した(第6図)。本来であればモデル



第6図 21号遺跡三次元モデル生成・解析状況

中に3点以上の座標点が判明していないと正確なオルソ画像を作成することはできないが、報告書掲載の平面実測図の形状を頼りに、真上から見た角度と思われる位置で画像を生成し、さらに縮尺や下層の大岩との位置関係についても、既存の図面を参考に位置を補正している。

このようにしてオルソ画像(第7図)を作成した上で、調査状況2と



第7図 21号遺跡の三次元オルソ画像（左：1970/5/15、右：1970/5/21）

3を比べると、調査状況2から掘り下げて完掘した調査状況3のほうが、石組の平面プランを最もよく表していることが明らかである。そこで、5月21日の画像のトレースを行った（第8図）。

さらに、オルソ画像で確認できた報告書に「北西辺と南西辺などに明瞭な岩の削り跡」（橋口1979）と記載された巨岩の表面を削った溝状の掘り込みの上端のラインについて、可能な限り図化を試みた（第9図）。

この図から21号遺跡についての検討を試みる。今回作成した図面は、あくまで写真を合成した2次的なデータであることに注意が必要であるが、以下のとおり読み取れる⁽¹⁷⁾。

石組1

ややいびつな平行四辺形の石列が中心の大石を囲む石組遺構である。石列は、東隅を中心に北東辺の半分と南東辺のほぼ全体を欠き、外法長軸2.8m×短軸2.3m、内法長軸2.3m×短軸2.0mを測る。長軸は東南東—西北西（E25°S）を短軸は北北東—南南西（N31°E）を指す。石列は南西辺が西へ傾き、各辺は大石の四辺との平行を意識して作られているようにもみえる。

巨岩の表面を削った掘り込みは幅25～50cmを測り、巨岩や配置される石の形状に合わせていることから、石組構築に当たって巨岩の傾斜や凹凸の影響を減らし、石を安定させて配置するために作られた、まさに「基礎工法」（小田2012）といえるものである。

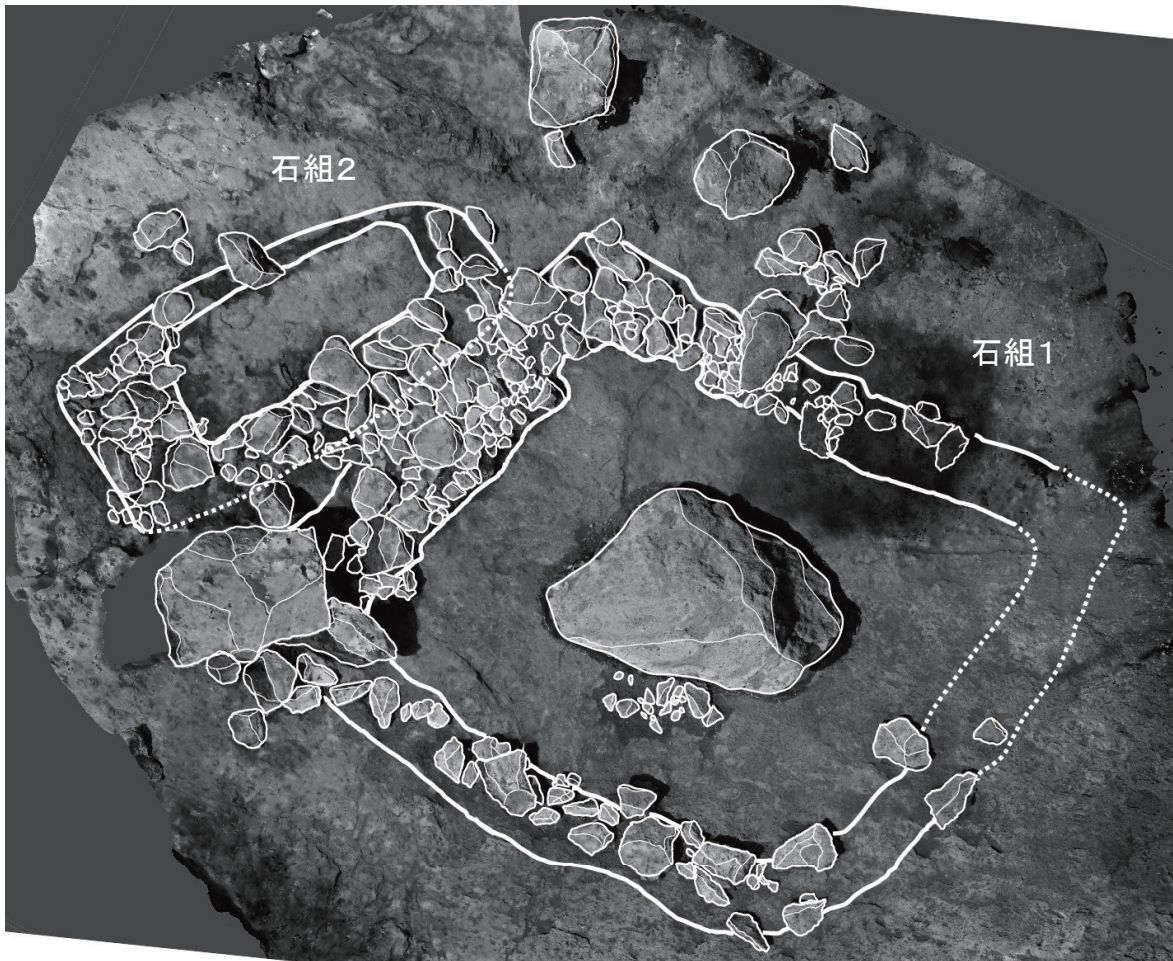
ただし石組の東隅周辺は当初から石列が作られなかった可能性がある。掘り込みのプランをみると、北西辺と南西辺は明瞭であるのに対し、東隅周辺の南東辺東半および北東辺東半には掘り込みはみられない。写真12をみると巨岩自体の起伏により、石組の東隅に



第8図 21号遺跡平面図（1970/5/21のオルソ画像をもとにトレース）

かかる部分が高くなっていることがわかる。東隅部分はこれを区画の一部とし、当初から石列を作らなかったのではないだろうか。東隅と対になる南隅側には掘り込みがある事もこれを裏付けると考える。

また先述のように大石の下には土の堆積が残されていた。報告書では「腐葉土」として



第9図 石組1・石組2トレース図（オルソ画像から判別できる溝状掘込を加筆）

人為的なものではなく、流れ込みとして解釈されている。しかし、遺構検出状況（写真2）をみると調査前の巨岩上面は多量の土で覆われ、これらをすべて自然のサイクルの結果とするのは難しいのではないだろうか。弓場は「祭場の低い方には小角礫が敷かれており、祭場を平らにしようとした跡がうかがえる」（弓場1988）とする。確かに大石南側には小角礫の分布があるが、石敷だけで斜面のある巨岩に大石を安定して設置することは難しい。このことから、石組構築に当たっては、巨岩上に土を運び平坦面を作り出すという工程があったと考える。さらに大石の直下から遺物が出土していることは、この平坦面を構築する際に、祭祀が行われた可能性もあると考える。

石組2

巨岩平坦面の北西に位置し、石組1の北西辺と接し、一段低くなった場所にある。平面形は外法長軸1.9m×短軸0.8m、内法長軸1.1m×0.5mの北東側がすぼむ隅丸長方形で、掘り込みの幅は10～45cmを測る。長軸は北東—南西（N60° E）方向を、短軸はやや南寄りの南東—北西方向（N32° E）を指し、石組1と異なる軸を持つ。長軸は北西辺より南東辺が広く、短軸は北東辺に比べて南西辺が広がっている。

石組1と同様に構築にあたって巨岩の岩肌を溝状に削る掘り込みが確認できるが、石組1と比べるとより深く明瞭に刻まれている。

遺物については「玉類の出土が見られた」と報告書に記述がある。石組2の構築に際しても祭祀が行われていた可能性はあるが、原図には遺物の出土状況は記載されておらず、遺物に関わる情報は乏しい。

石組1と石組2の関係

石組1と石組2の構築順については、石組1の北西辺で石列が一体となっており、写真から先後関係を判断するのは難しい。ただし、石組の北西辺と接する南西辺が幅広く、多くの石が配石されていることや、掘り込みの南西端が石組西隅の大ぶりの石と位置が合うことから、石組1を意識して構築されているように見える。このことから、石組1の構築後に石組2が作られたと想定するのが妥当であろう。ただし、石組2は石組1と軸や構造がやや異なる。石組1の掘り込みが巨岩を石で叩き割るような痕跡をもちプランが不明瞭であるのに対し、石組2の掘り込みはより深く明瞭で、鉄製の鑿など鋭利な工具を利用したような印象を受ける。このことから、石組1の構築後、少し期間を置いてから石組2が作られた可能性も考えられる。

5. 小結

以上の検討により、21号遺跡の遺構について以下のことが指摘できる。

- (1) 石組1の平面プランは、これまでの復元案のような整った長方形ではなく、東隅を欠き、東南東に軸をとるややいびつな平行四辺形となる。石列は四隅が東西南北を指すこと、またほぼ長方形になることから、方位や区画を意識しつつも、巨岩の傾斜や起伏、中央の大石等を意識して作られたと考える。
- (2) 巨岩斜面に石列を作るのにあたり巨岩に掘り込みをした上で石を配置していることが確認できる。また石組1の東隅部分は自然の流出により石列が失われたと考えられてきたが、東隅周辺はもともと石列が作られず、巨岩の自然の起伏を活かしていた可能性がある。
- (3) 大石下の土の堆積は、石組1の構築に際して、小角礫混じりの土で埋めて平坦面を作ってから大石を設置するという工程があった事を示している。更に、その土が遺物を含むことは、石組1の構築時に祭祀が行われた可能性が考えられる。
- (4) 石組2は隅丸長方形のプランを持ち、石組1と異なる軸や構造を持ち、石組1の構築後に作られたと考えられる。

以上を踏まえると21号遺跡の構築過程は以下のように復元できる。

①巨岩表面を打ち欠いて平行四辺形の溝状の掘り込みを作る。この時に巨岩に起伏のある東隅は除く。②掘り込みにそって幅25～50cm程度に石を配置して方形の石列を作る。西隅は特に大ぶりの石を置く。③石列内側を、小角礫混じりの土で埋めて巨岩の自然な凹凸を整えて平坦面を作る。④石列の中央に大石を置いて石組1を完成させる。その後、⑤石組1北西に石組2を作る。石組1北西辺と西隅の大ぶりの石を長軸にとる長方形の溝状

の掘り込みを作り、石組1と同様に小礫で石列を作り、石組2を完成させる。

また石組1の構築に際して祭祀が行われていた可能性を指摘したが、この祭祀はいわば地鎮祭的な性格のもので、石組1および石組2の構築後に行われた大量の奉獻品を捧げるいわゆる「国家的」な祭祀と一連のものとして理解するのが、現段階では妥当と考える。今後、遺構の詳細な検討と合わせて出土遺物の再検討をすすめることによってはじめて祭祀の実態を明らかにすることができるだろう。

6. 今後の課題

以上、沖ノ島祭祀遺跡の調査にともなう記録写真の分析により、21号遺跡を読み解いてきた。今回の分析は、調査に伴うものではなく、また現地での検証を欠くことから、あくまで限界はあるが、今後、21号祭祀遺跡を検討する材料として呈示しておく。

本論では、21号遺跡の祭祀の復元までは及ばなかったが、石組遺構はF号巨岩と一体のものとして考えていく必要がある。石組を祭壇と考えると、これまで指摘されている通り中心の大石が最も三角形に近い形状に見える北西側からの視点が重要であろう。巨岩の北西から見ると三角形の大石は南東を差し、更に巨岩のその先は視界が開けている（写真12）。報告書では「F号巨岩南側には視界をさえぎる樹々の茂りが少なく、巨岩上に立つと小屋島、御門柱こやじま みかどばしらなどが眼下に浮かび、玄界灘を一望のもとにおさめられる絶景が広がる」（橋口1979）とある。南東の方角には沖津宮の鳥居の役割を果たす岩礁があり、更にその先には海を越え中津宮のある大島、辺津宮のある九州本島の田島がある。7世紀後半には大島で中津宮の起源となる御嶽山祭祀遺跡、九州本土の田島で辺津宮の起源となる下高宮



写真12 巨岩上からみた石組1と石組2（北西から1970/5/21）

祭祀遺跡が出現するが、それよりも早い段階で沖ノ島から本土へ向けた宗像大社三宮の信仰の軸線が意識されていてもおかしくない。やや筆が滑ったが、今回、21号遺跡の調査経過をたどり新たに検討を行うことで、改めて本遺跡の重要性を認識することができたと考ええる。

沖ノ島祭祀の意義については、世界遺産登録を皮切りに活発な議論が行われている。一方、その議論の元となる発掘調査の情報源は3冊の報告書に限られている。しかし、沖ノ島で行われた古代祭祀についての本質的な議論を深める為には、本稿で行ったような記録類の整理と詳細な遺構の再検討を沖ノ島の全ての祭祀遺跡で行う必要がある。それと同時に祭祀遺跡から出土した8万点の国宝の再整理・調査を長期計画に基づき適切に進めて行くことが必須である。報告書に掲載されている遺物は全体の一部であり、それ以外の膨大な遺物が宗像大社神宝館に収蔵されている。調査から半世紀が経過した現在、再整理・調査を行えば多くの新たな知見が得られるだろう⁽¹⁷⁾。またこの作業は、沖ノ島の発掘調査関係者の証言が得られるうちに進める必要がある。先人が残した貴重で膨大な資料を生かし、その意義を後世に伝えていくためにも、沖ノ島祭祀遺跡の基礎的な調査研究を絶え間なく着実に進めていくことが、我々に残された課題である。

本論は令和2(2020)年12月8日にデジタル・アーカイブ事業で、小田富士雄氏から沖ノ島発掘調査の聞き取りを行った際、21号遺跡について言及されたことが契機となっている。第3次調査の調査経緯については、小田富士雄氏、松本肇氏に事実確認いただいた。記して感謝したい。また、この検討は、宗像大社文化財管理事務局福嶋真貴子氏と宗像市文化財課原俊一氏、九州歴史資料館の伊崎俊秋氏が進めてきた沖ノ島の発掘調査に関わる記録類の長年の整理を無くしては行えなかったものである。三者からは日常的にアドバイスいただくと共に、執筆に際して確認をいただき、都度丁寧なご指導をいただいた、記して感謝したい。

(福岡県世界遺産室)

註

- (1) 文化庁文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)を受けて実施した令和元年・二年度デジタル・アーカイブ構築事業によるものである。
- (2) 沖ノ島において祭祀遺跡は23箇所確認されているが、4号と20号は同一の遺跡であることが第3次調査で確認されている(宗像大社復興期成会1979)。
- (3) 平面実測図に記載された長方形の範囲(第3図上)は遺物出土状態実測図(第3図下)の範囲に対応するものであり、祭壇の復元範囲は報告書では記されていない。原図では、北西-南東(N-45°-E)という祭壇の軸を中心に実測が行われているが、報告書の凡例に「すべて図面の上部を「磁北」もしくは「真北」としてある」(宗像大社復興期成会1979)とあり、この編集方針に合わせて掲載されたものである。小田はこれを祭壇の復元範囲が45°ずれているものと理解していた(小田2012)が、その復元案(第4図)は調査時の所見を示したものである。なおこの指摘は宗像市文化財課原俊一氏、九州歴史資料館の伊崎俊秋氏による。
- (4) 篠原祐一は石製祭具の検討から「4世紀末葉から5世紀後葉までの遺物が出土している」(篠原2011)とし、新谷は「6面の銅鏡のうちの1面が舶載鏡の獣帯鏡で、それと類似した獣帯鏡が百済の武寧王陵(523年没)や倭国の伝仁徳天皇陵(現ボストン美術館蔵)から出土していること

からすると、この21号遺跡の推定年代は、5世紀中葉から6世紀初頭まで幅がある」(新谷2012)とし、また花田勝広は「3段階の21号では、巨岩上の石組み祭壇があり、素文鏡・獣文宜子孫獣帯鏡・子持勾玉・滑石製剣形品・有孔円板・蕨手刀子などより、集成編年5期～8期前半までの祭祀がなされているようである。時間幅があり、石組み祭壇の設置が当初からあったものかはわからない。獣文宜子孫獣帯鏡・画文帯同向式神獣鏡Cは7期～8期の奉獻品と考えられる。大平茂氏による子持勾玉分類でB-2類であり、5世紀中葉に比定される。鉄製武器雑形品(刀・矛)・工具雑形品の出現が注目される」(花田2012)とし、5世紀でも複数時期にわたる祭祀を想定している。また花田は更に21号遺跡は「時間幅があり、石組祭壇の設置が当初からあったものかはわからない」(花田2012)として、F号巨岩上に石組に先行する祭祀が存在した可能性を示唆している。

- (5) なお写真3・9・10・12を除く全ての写真は今回初公開であり、宗像大社神宝館所蔵。また、写真3は『海の正倉院沖ノ島』(毎日新聞社1972)からの転載。写真9・10・12は報告書掲載写真(宗像大社復興期成会1979)。
- (6) 写真足場の組立は大仕事であり、測量調査のために渡島していた鹿島建設吉村政義、山本造園業の中倉民男氏の果たした役割が大きかったとある(p.15-16)。この足場から多くの記録写真が撮影されていたことが今回の分析につながった。
- (7) これらの資料の一部は、下記MUNAKATA ARCHIVESのウェブサイトにて令和3年3月以降公開予定。<https://www.munakata-archives.asia/>
- (8) 「Ⅱ 図版 21号遺跡」PL.99～102(宗像大社復興期成会1979)
- (9) 「Ⅰ 本文 調査の記録」p.563～577(宗像大社復興期成会1979)
- (10) 沖ノ島第3次学術調査のミーティング記録、実測図の原図の閲覧については宗像大社神宝館に閲覧の機会をいただいた。記して感謝申し上げます。
- (11) 平面実測図の原図を見ると、掘り込みの南西辺の一部は図化されているが、全周せず、途中で実測をやめており、報告書に記載もされなかった。
- (12) この日付は定かではない、写真注記では5月21日と5月23日の二つの日付があり、調査日誌では22日に祭壇の復元をしたとある。ここでは調査日誌の日付をとっておく。
- (13) 調査状況2で平面実測図が完結し、多くの写真が撮影されていることを踏まえると、調査中は調査状況2が遺跡の状況を最もよく表す状態と考えられており、調査状況3は確認のための掘り下げだった可能性がある。
- (14) この写真が報告書の記述に該当するものであることを松本氏にご確認いただいた。
なお、篠原は白玉の散布状況の検討から「神籬状のもの(柵に祭具を取り懸けたようなもの)」は、大石上端に据えられたのではなく、大石を支えに立てかけたものとする(篠原2012)。
- (15) 松本氏にも確認いただいたが、色分けの理由は特定することはできなかった。
- (16) 大石の下から遺物が出土していることは間違いないと松本氏に確認いただいた。
- (17) 今回、過去の写真から三次元モデルを生成することに成功したが、これは異なる角度から同じ被写体を何枚も写真撮影されていたことがそれを可能にしたと言って良い。もちろん当時の撮影者は三次元モデルを生成するためにこのような撮影をしたわけではないが、結果、その後の技術革新によって可能となったわけである。調査時点において不要とも思われるデータを執拗に収集しておくことの重要性を改めて痛感した次第である。

なお、オルソ画像および三次元モデル作成については、岡寺良氏(九州歴史資料館)の協力を得た。

- (18) 特に21号遺跡で数多く出土している金属製品は、透過X線などの手法で整理作業を行えば遺物の形状や残存状況などより多くの情報が得られ、保存管理の観点からも重要である。

参考文献

- 小田富士雄 2012「沖ノ島遺跡の再検討2」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ-2』(小田2020『古代九州と東アジア』同成社に再録)
- 笹生衛 2011「沖ノ島祭祀遺跡における遺物組成と祭祀構造—鉄製品・金属製模造品を中心に—」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ-1』
- 新谷尚紀 2012「日本民俗学(伝承分析学・traditionology)からみる沖ノ島—日本古代の神祇祭祀の形

- 成と展開一」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ-2』
- 篠原祐一 2011「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ-1』
- 花田勝広 2012「I. 宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」『第15回九州前方後円墳研究会 北九州大会
発表要旨・資料集 沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』
- 辻田淳一郎 2012「2. 九州出土の中国鏡と対外交渉—同型鏡群を中心に—」『第15回九州前方後円墳研
究会 北九州大会発表要旨・資料集 沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』
- 橋口達也 1979「第9節 21号遺跡 1. 遺跡」『宗像沖ノ島』吉川弘文館
- 毎日新聞社 1972『海の正倉院 沖ノ島』
- 松本肇 1979「第9節 21号遺跡 2. 遺物の出土状況」『宗像沖ノ島』吉川弘文館
- 宗像大社復興期成会 1979『宗像沖ノ島』吉川弘文館
- 宗像大社復興期成会 1971『沖ノ島Ⅱ 宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和45年調査概報』
- 弓場紀知 1988「沖ノ島の祭祀遺跡」上田正昭編『住吉と宗像の神』筑摩書房